

マルカタ王宮「列柱大ホール」天井画における 「スクロール文様」の復原研究

マルカタ王宮に関する研究 II

RECONSTRUCTION OF "THE SCROLL PATTERN" ON THE CEILING OF THE GREAT COLUMNED HALL AT THE MALKATA PALACE Studies on the Malkata Palace II

西 本 真 一*

Shin-ichi NISHIMOTO

Numerous fragments of "scroll pattern" (pattern consists of alternate bands of spiral and rosette) were excavated from the Great Columned Hall at the Palace of Malkata in the investigations carried out by Waseda University during 1985-1988. It is considered that this geometric pattern must have been located on the east and west aisles of this room. A. Badawy restored the painted ceiling of the Great Columned Hall in his "A History of Egyptian Architecture III", where the ceiling of aisles are painted over with quadruple spiral pattern. However, from the actual finds, it is concluded that the decorative motif of the ceiling in this Hall was not quadruple spiral pattern, but "scroll pattern".

Keywords: Malkata palace, Ancient Egypt, decorative painting, scroll pattern, painted ceiling, Amenhotep III

マルカタ王宮, 古代エジプト, 装飾画, 渦巻文様, 天井画, アメンホテプ三世

まえがき

前稿¹⁾ではアメンホテプ三世の建立によるエジプト・マルカタ王宮址内の、「王の宮殿」の中心部に位置する「列柱大ホール」(以下「ホール」と略。図-1参照)から出土した彩面泥片のモチーフや形状の特徴について分析しながら研究を行い、この「ホール」の中央柱間部分の天井にかつて描かれていた連続するネグレット画像や、この画像の間、上下エジプト王名・サテ・ラー名を含む聖刻文字列などについて復原考察をおこなった。本稿は前報と同様に、早稲田大学古代エジプト建築調査隊による発掘調査の成果を踏まえ、実際に出土した彩面泥片の分析結果に基づきながら、復原の対象として残されている当「ホール」の両脇間部分の天井について主に考察をおこなうものである。

すでに前稿で、「ホール」の両脇間部分の天井には黄色の渦巻文様とローゼットが描かれていたと推定されることを述べたが、当「ホール」におけるこの幾何学文様の向きや大きさなどに関してはまだ残っていない

ため、ここではそれらについての検討を進めていきたい。

また、本稿で明らかにされる「ホール」の両脇間部分天井画の復原図を踏まえ、前稿において復原されたこの

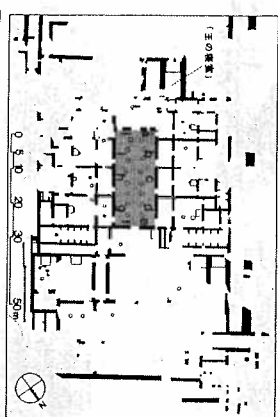


図-1 マルカタ王宮「王の宮殿」平面図 (細点部分は「列柱大ホール」を示し、またa-jはこの部屋における遺物の出土場所を示す。a=S(W), b=W(S), c=W(M), d=W(N), e=N(W), f=N(E), g=E(N), h=E(M), i=E(S), j=S(E))

本稿の内容の一部はすでに注1)の文脈において発表済みである。
* 日本学術振興会 特別研究員

部屋の中央柱間部分の天井画とをあわせて、当「ホール」の天井画の全体に関する復原についても若干の論考をおこなうこととする。

1. スクロール文様片とスパイラル文様片の類別

当「ホール」より出土した幾何学文様を示す彩画面片のうち、黄色の渦文をモチーフとすると思われる諸断片で、まず比較的彩画面の保存状態が良好なもの（写真1～6、また図2、A～H、及び図4、1～K参照）を集めて分析をおこなった結果、2種類の幾何学文様の存在



写真-1 N(W) 地点出土、スクロール文様片 (写真-1 2. C 参照。写真中のスケールは 10 cm)



写真-3 S(W) 地点出土、スクロール文様片 (写真-2, E 参照。写真中のスケールは 10 cm)



写真-4 N(W) 地点出土、スクロール文様片 (写真中のスケールは 10 cm)



写真-5 W(N) 地点出土、色落を伴うスクロール文様片 (写真-5, O 参照。写真中のスケールは 10 cm)



写真-6 W(S) 地点出土、スパイラル文様片 (写真中のスケールは 10 cm)

を想定することができた (図-3, A, B)¹⁾。ひとつは黄色の渦文が並んだ帯と、青いローゼットが並んだ帯とのふたつの帯が交互に繰り返されることによつてあらわれるパターンであり (図-2, A～E, 図-3, A), 便宜上これを「スクロール文様」と名づけることにする²⁾。もう一方の幾何学文様は、黄色の渦文が用いられる点ではスクロール文様と同一であるが、ただしこの場合の黄色の渦文は四方に伸びる帯を持っており (図-2, F～H), また黄色の渦文が市松模様に配置されるパターンの中にはローゼットが間隔を埋めるように描き込まれていた (図-3, B)。以下、この文様については「スパイラル文様」と仮称する³⁾。

スクロール文様では黄色の渦文とローゼットが接しているのに対し (写真-1, 3, 4, 図-2, A～C, 及び図-3, A, また図-4, 1, J), スパイラル文様の場合では黄色の渦文とローゼットとの間はいくらかの間隔が置かれていた (写真-6, また図-2, F～H, 及び図-3, B)。またスクロール文様の場合では青いローゼットのみが用いられていたのに対し、スパイラル文様の場合では赤いローゼットと青いローゼットの両方が見られた。後者の場合で赤いローゼットが描かれる際には、このローゼットと黄色の渦文の間隔の地は必ず青色で塗られ、また青いローゼットが描かれる際にはローゼットと黄色の渦文の間隔の地は青色で塗られている。スクロール文様では、ローゼットと黄色の渦文との間隔の地は例外なく赤で彩色されていたが、この文様に見られる青いローゼットの中央には赤色の小円があるもの (写真-4, 図-2, D, また図-4, 1) とないもの (図-2, B, また図-4, K) の両方がうかがわれた。先述したようにスパイラル文様においても青色のローゼットは描かれているが、しかしその中央部は確認しうる限り、いずれの場合でもただ青く塗られているだけである。黄色の渦文の中央部分は全て緑色に塗り潰された円が描かれており、この点に関してはスクロール文様とスパイラル文様の両者ともに同じであった (写真-1, 6, また図-2, 3 参照)。

ここでふたつの文様片を判別するための相違点をまとめると、

- (1) 赤いローゼットが黄色の渦文とともに描かれている彩画面片はスパイラル文様片と判断される。
- (2) 黄色の渦文の外側に青い地色として塗られている場合についても、その彩画面片はスパイラル文様片と判断されてよい。
- (3) 青いローゼットの中央に赤い小円が描かれているならば、その彩画面片はスクロール文様片である。
- (4) 緑色の円を中心とした黄色の渦文だけが描かれている彩画面片については、裏の本数によって判別が可能である。すなわち、2本の帯が描かれている場合はスクロール文様片であり、4本の帯の場合はスパイラル文様片で

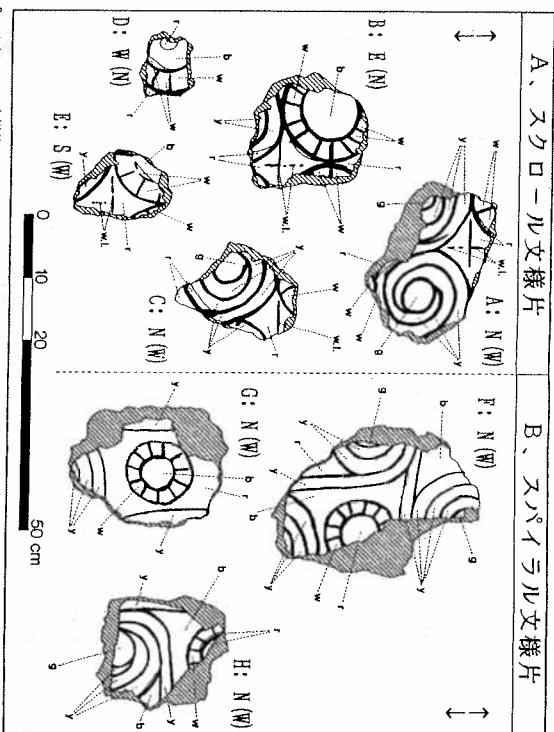


図-2 スクロール文様片・スパイラル文様片の例 (矢印は裏面に残存する天井地下材の遺跡の方向を、また斜線部分は彩画面の文様箇所を示す。黒ベタ部分は黒色を表す。その他の色彩については次のとおり: r=赤, b=青, w=白, y=黄, g=緑, w.l.=白線)

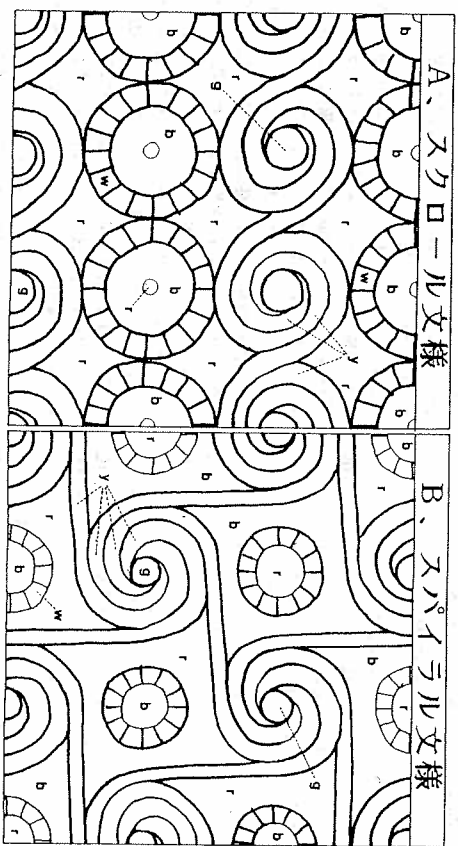
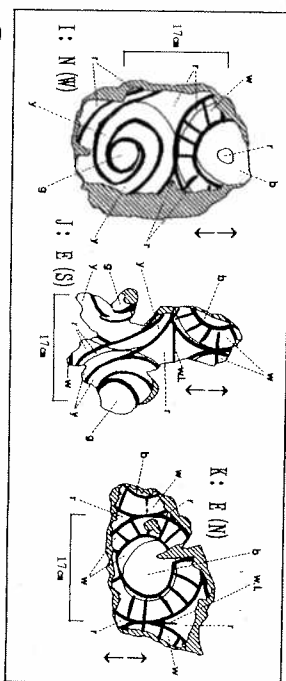


図-3 スクロール文様・スパイラル文様復原図 (式) 黒線部分は彩画面片上の黒で引かれた線を示す。その他の色彩は以下のとおり: r=赤, b=青, w=白, y=黄, g=緑)

と判断される。

(5) 青いローゼットが描かれているものうち、黄色の渦文が接して描かれているものについてはスクロール文様片であるとみなさる。

以上の点を判断基準とし、スクロール文様片とスパイラル文様片との類別をおこなった結果を表-1に示す。断片の大きさが小さく、黄色の渦文だけが描かれているに過ぎないためにスクロール文様の断片か、それともスパイラル文様に属するものかの判別がつかないものについては別途、「黄色渦文」として分類項を設けた (出土



表一「列柱大ホール」出土物一覧表（本稿ではスクロール文様を中心に扱うため、前編1）における表一」を簡略化している）

[illegible]

るだけの映画画片についてはローゼンゼットの断片である可能性があるが、正確には見きわめ難いために「ローゼンゼット」の項を設けず、「その他映画画片」の項に含めた²⁾。舊いローゼット断片であるということだけが識別される映画画片について、スカラー文様で用いられているローゼットのもの断片であるか、スカラー文様片のローゼット断片であるかの判別がつかないため、同様に「その他映画画片」の項に区分した³⁾。なおローゼットはこれらスカラー文様とスカラー文様の他に、色帯Bタイプ⁴⁾においても見られるが、大きな点、ローゼットと色帯間との空隙が白色で塗られるなどの相違から、上記2種の幾何学文様に見られるローゼットとの判別は容易であった。

スワロウ文様の断片とみなされるのは計 469 点と判
断された。これは当「ホー」から出た計全彩画片数
のほぼ 27% に当たる。スワロウ文様と判別される彩
画片についてはわずかに 6 点に過ぎず、出土点数がわ
めと少ないことから、スワロウ文様片は陳室から混入
したものであると想定される⁽¹⁰⁾。

スワロー文様に属するものかスパイラル文様に属するものの判別がつかなかった黄色の渦文のみが描かれる

る断片については、以上の出土点数をもとにして考える限り、その多くがスクロール文様片で占められているはずであると推定することができよう。

2. スクロール文様片の特徴

上の壁面を有する断片の裏側には天井下地材の痕がご覧
スグロール文様を描かれていた彩画のうち、一定以
上の厚みを有する断片の裏側には天井下地材の痕がご覧
まわれ（写真2）、逆に壁面片であることを示す泥拵瓦
の圧痕を有するもの是一片も見られなかった。このこと
から、「ホール」出土の彩画片より復原されるこのスグ
ロール文様は、かつては当「ホール」の天井に描かれて
いたものであったと想定される。

前編で述べたように¹⁹⁾、当「ホー」から出したさまざまな裝飾モチーフを有する映画のうち、かつては「ホー」の天井画を構成していたと明確に認められるものはネグレット文様と聖文文字片、色帯のAタイプ、及びスクロール文様の4種であり、このうちネグレット文様と聖文文字片については他の建築装幀との比較研究から、当「ホー」の中央柱間部分の天井に描かれていたもの断片であると判断される。従って数多く出土したスクロール文様片については、当「ホー」天井の残余の部分、すなわち両脇間部分の天井に描かれていたもの断片であると想定することができ、また色帯Aタイプに関しては中央柱間部分の天井の連続したネグレット文様の周囲と、両脇間部分の天井のスクロール文様の周囲の双方を縁取っていたと考えられる。

ストロークの極は、常に連続して伸びる黄色の線と、同じく常に連続して描かれる青いローゼット文様とが交互に繰り返されることによって構成されるモチーフである点はすでに述べたが、このほかに、黄色で塗られるはずの渦文が相対色、緑色であるはずの渦文の中央の中央にある小円が黒色、渦文とローゼットとの隙間が黒色、青いはずのローゼットが黒灰色、そのローゼットの中央にある小円が黒色、渦文とローゼットとの隙間の地が暗褐色である断片が、W (S) 地点からのみ、数点

見つかっている¹³⁾。しかし、異なった色づかいがなされているこれらのスクロール文様片について今回、改めて観察をおこなった結果、彩画が施されている泥留部分にも他の断片には見ることができないような差異がうかがわれることが明らかとなった。通常、彩画片の泥留部分には黒色に近い褐色を呈しているが、上記の色づかいが異なるスクロール文様片の場合においては泥留部分が明確な色であり、また泥の固さも通常のものと比較してやや固

出王止じスゴロー文様片 460 点のうち、青いロゼットの中心部を示すと思われる彩画片については全部で 44 点であったが、これらロゼットの中央に赤い小円が描かれたものと、赤い小円が描かれていないものと 2 種類が認められた。出土場所別にこの 44 点の彩画片を類別したのが表 2 である。

「ホール」を長軸方向に沿って中心線で二分した際、 $S(E), E(S), E(M), E(N), N(E), N(W)$ の各地点は、この強度の東側半分に当たり、また、 $S(W), E(W), W(M), W(N), N(W)$ の各地点は同じ部屋の西側半分に当たっている。表-2からは着いたローゼットの中心部

表-2 スクワール文様・ローゼット中心部分を示した彩面片の出土場所別数

表—2 スクール文様・ローゼット中心部分を示した彩画面の
出土場所別点数

出土地点	中心の小円の有無				出土地点
	部屋裏側		部屋西側		
	有	無	有	無	
S(E)	1	0	0	0	S(W)
E(S)	0	3	8	0	W(S)
E(N)	0	0	0	0	W(N)
E(W)	0	14	4	0	W(N)
N(E)	0	6	8	0	N(W)
小計	1	23	20	0	
計	24		20		

を示す彩画面全44点のうち、24点が東側半分より、また20点が西側半分より出上っていることが了解される。全部で44点という少ない出上点数であるが、しかしスクロール文様で用いられている青いローゼットの中央部分を示す彩画面の数量に関しては、当「ホール」の東側と西側とで、ほぼ均等に振り分けられているというおまかせ傾向を、そこから読み取ることができよう。

に注目した時、「ホー」の事柄から出土したものと西側から出土したものととの間では異なる傾向がきつりと見られる。当「ホー」の東側からは、ローゼットの中央に赤色の小円がうかがわれるものがわずかに1点出土したに過ぎず、赤い小円が見られなかったものが23点を占めていた。逆に「ホー」の西側のすべては赤い小円が現われ、「ホー」の東側から出土したローゼット片の検相とをきわめて対照的であった。

井に描かれていたスクロール文様」の西側脇部分の入り口の欄外に、当「ホール」の西側脇部分の入り口の欄外に、当「ホール」の東側脇部分の天井のスクロール文様について、ローゼットの中央部分に赤い内円を描くことが忘れられたと考えられる⁹⁾。

3. 先行調査隊による彩画片埋め戻し状況の推定

相が異なるということ。こうした分布状況から推して、1910年代美術館蔵の「ホル」の複製は西側として、出土した彩画面の複製は東側として、この部屋の発掘調査がおこなったトロロビタナ美術館蔵調査による彩画面の埋め戻しの状況、ある程度うかがい知ることが可能である。この部屋はすでに先行調査の際によって発掘がなされており、礎石の断片を除いて遺物はすべて部屋の壁面に寄せられ、埋め戻されていた。このため彩画面についても、落下した当初の位置より動かされていることは明白である。にも関わらず「当「ホル」天井画の復原考察に際しては、彩画面に示されるモザイクが「ホル」内の出土場所によって微妙に異なる」という調査結果から多くの類似がおこなわれている。この復原考察の根拠をさらに明らかにする上でも、先行調査の際による彩画面の埋め戻しの状況を確定し、早稲田大学調査課による再発掘時の、各彩画面の出土場所を手かりとして考察をおこなうことの妥当性を述べておくことが必要であると思われる。

先述したような当「ボール」におけるスクロール文様
 片の分布状態からは、メトロポリタン美術館調査隊に

よって彩画片は基本的に、部屋の西側に落下していた彩画片類はそのままだと西側壁面の近くへ寄せられ、部屋の東側で発見された出土物は同様に東側の壁際に移されたと想像することができ。おそらく先行調査隊は「ホール」から出土した彩画片の保全を考慮してこの部屋の壁際からすべての出土物を移したものの、できるだけ発見時の位置に近い場所を選び、それらを丁寧に埋め戻したと見られる⁹⁾。このため王宮の倒壊時などに侵入した彩画片を除き、異なった部屋から出土した彩画片同士の人為的な混交が一応避けられたのはもちろんのこと¹⁰⁾、当「ホール」の場合で見受けられるように、同じ部屋から出土した彩画片についても出土場所によって彩画片同士から分離し、モチーフが微妙に異なるという結果を生じることとなり、落下した正確な位置については不明でありながらも、うかがわれる彩画片の傾向からおおまかなモチーフの配置を探ることが可能であると考えられる。

ただし、ネグベト画像や聖刻文字列が描かれた彩画片の場合では、前稿で作成された天井復原図¹¹⁾をもとに考えれば東側の壁際からはネグベト画像の向かって右側の部分の断片、及び左から右読みの聖刻文字列が、また西側の壁際からはネグベト画像の向かって左側の部分を示す断片と右から左読みの聖刻文字列が、それぞれ多く出土する結果となるはずである。しかし「ホール」出土分のネグベト画像を示す断片や聖刻文字列について分類をおこなってみても、スクロール文様の場合で見られるように出土場所別によって画片の接相が異なるという傾向は明確にうかがわれなかった。

当王宮址から見つかった天井画片については、天井からそのまま彩画面を下にして、正確に真下の床面に落下した姿では発見されず、彩画面を上にした状態でしばしば出土していることがウイロンツクによって報告されている¹²⁾。また早稲田大学調査隊によって「王の寝室」が発掘された際には、彩画片は折り重なるようにして出土しており¹³⁾、この部屋でもウイロンツクが述べたように彩色面を上にした状態で発見された彩画片が少なくなかった。「王の寝室」から出土したネグベト画像や聖刻文字列の落下位置と、それらの彩画片に描かれたモチーフにおける左右の区別との関係についてはおおむその対応を認めることができると言えるが、しかし規定され、「王の寝室」天井のネグベト画像や聖刻文字列の向きと、実際に出土した彩画片の落下位置とが合致しないものも少例ではあるがうかがわれる¹⁴⁾。

こうしたウイロンツクの報告や「王の寝室」の発掘調査時における観察からは、天井画片が天井から落下した際には、そのまますべて彩画面を下にして床面へ落ちたわけではなかったことが示されていると思われる、また彩画面を上にした状態で出土したものが見られる点を勘案するならば、いくつかの彩画片は天井から落下する際に

回転しながら落ちたのではないかと推測される。出土した彩画面泥片の裏側には多くの場合、天井下木材の圧痕が認められ、植物を束ねて作られたこの天井下木材が痕跡を被ったので彩画面片が落下したのと思われるが、おそらくその際、痕跡から免れた天井下木材が落下しようとする彩画面泥片に押し引くような作用を与えたために、彩画面はいくらか回転しながら床面上へ落ちる結果になったと想像される。

以上の点を踏まえた場合、落下の際に回転を伴いながら果たしてこの彩画面片が天井から真下に落ちたかどうかについてはまったく不明であると言てよく、むしろどのような規定の下でこの彩画面の落下位置については、天井における本来の位置の真下の地点より多少離れた場所に落下した可能性もあるということをおおまかに考慮に入れておく必要があると思われる。

当「ホール」に描かれていたネグベト画像や聖刻文字列を示す彩画面の場合、これらのモチーフは中央柱間部分の天井に描かれていたと想定されるため、全体の傾向としては、そのまま中央柱間部分の床面に集中して落下したと考えられる。しかしいくつかの彩画面の落下位置については、それらが回転しながら落ちたと想像されるので、天井から正確に真下の床面へ落下せずに、そこから多少の距離を置いた近辺の場所へ落ちる場合のあったことを含めて考えるべきであろう。

当「ホール」の中央柱間部分の天井に描かれていたと想定されるネグベト画像の全幅は3.6mほどにしか過ぎない(復原されるため、本来は天井の東側に描かれていたはずのネグベト画像の断片が部屋の中心部に近い西側に、また天井の西側にあったはずの聖刻文字列片が部屋の中心部に近い東側に落下することは、きわめてあり得ることのように思われる。「ホール」における彩画面片の実際の出土状況はまさにこのような状態を強く示唆していると考えられ、当「ホール」のネグベト画像片や聖刻文字列片については、メトロポリタン美術館発掘調査隊がこの中央柱間部分の床面上に残存していたすべての彩画面片を大きく二つに、東側と西側の壁際へ移す以前の段階ですでに、本来は天井の東側に位置していた画片と西側にあった画片とが、半ば混交されていた状態にあったことが推定される。

その一方で、S(W) 地点、及びW(S) 地点出土の聖刻文字列片の中だけから特異な文字列がうかがわれた事実¹⁵⁾は、この部屋の北側に描かれていた彩画面と南側にあった彩画面との間においては混交がおこなわれていないことを示していると思われる。「ホール」の北端から南端まで約28mの隔たれ方が、混交を免れた大きな原因と考えられよう。スクロール文様に関しては東西に位置する隣間部分の天井に描かれていたものであったために、天井面が崩壊した際にもその画片は基本的

にそれぞれ東西の壁際近くに落下し、「ホール」の東側と西側との間における混交は免れたと判断される。

4. 「列柱大ホール」の西側間部分天井画の復原考察

下木材の痕跡が見られるスクロール文様片に関しては、確認される限り、皆状に伸びる文様の方向性に対していずれも直交した方向に天井下木材の痕が残されている(図-2, A-C, E, また図-4, I-J)。当「ホール」のネグベト画像の復原考察を行った際、天井下木材はこの部屋の短辺方向に沿って並べられていたと結論させられていたと想定するのが自然であることから、このスクロール文様の向きは当「ホール」の長辺方向に逆行するように描かれていたと推定することができる。

「ホール」から出土したスクロール文様は全て泥モルタルの上に直接彩色がなされていたが、いくつかの画片においては黄色の褐文とローゼットとの隙間の赤い地色の下に白い線が引かれているさまがうかがわれた(写真-3, また図-2, A-C, E, 図-4, I, J)。白線が見られた画片はいずれも多かれ少なかれ赤色に塗られた部分が横接しており、このため赤色の部分を透かして泥モルタルの上に記された線を見ることが可能になったと思われる。従って他の同種の彩画面についても、本来は同ような線が引かれていた可能性が高い。

線幅は、明らかに筆を用いて描かれたと判断されるものと比較して細く、一定した太さでしかもたず引かれており、また線の引かれた周縁には線と直交した方向に飛沫が飛んでいるのが見られた。こうした観察結果から、この白線は筆を用いて引かれたというよりも、墨線を利用して長い距離の線が記されたと推定される。白線は皆状に伸びる文様に対して垂直方向に引かれた場合と平行した方向に引かれる場合の双方が存在した¹⁶⁾。垂直方向に引かれた線はローゼット同士、あるいは褐文同士を区画する線に相当し、また平行方向に引かれた線はローゼットの帯と褐文の帯とを区画する線に該当する。このためこれらの白線は皆状に引かれた基準線であって、格子内の一つ一つの正方形に内接するようにローゼットと褐文が描かれたのだと想定される¹⁷⁾。ただし、実際に描かれたローゼットと褐文については細かい点にこだわらずに比較的おおらかに描かれた形跡が認められ¹⁸⁾、この基準線に正確に従わず若干ずれた位置にローゼットの円弧などが描かれているものも見られた(図-2, B など)。

スクロール文様片の場合、ネグベト画片の場合のように比較的大きな断片としては残存していないが、基準格子の線が引き込まれた間隔を直接計測することができない。基準の格子からのはみ出しで描かれたローゼットや褐文がうかがわれたため、それらの大きさについては多少

の違いが認められると予想されるのであるが、ここで基準格子の大きさを求めるために試みとして褐文の中心とローゼットの中心との距離の計測を行うならば、N(W) 地点より出土した断片(図-4, I) から約17 cm という長さを得ることができ、この他に褐文の中心間、及びE(S) 地点より出土した断片(図-4, J) についてはまた後者についてはE(N) 地点より発見された例(図-4, K) からやはり同じ値である約17 cm という結果を得た。

一方、ローゼットの半径、及び褐文の半径がそれぞれ示されているすべての彩画面を抽出して採寸をおこなうと、褐文については約7.5 cm から10 cm までの間に分布する値が、またローゼットに関しては約7 cm から9.5 cm までの間に分布する値がそれぞれ得られる(表-3)。平均値としては各々8.7 cm, 8.5 cm という値が求められ、基準格子の大きさに相当する長さはローゼットの直径、及び褐文の直径であるのでこれらの数値を2倍するならばどちらも約17 cm となり、この値は直接褐文の中心間やローゼットの直径などを計って得られた値と一致した。

以上の結果から、スクロール文様に残されていた基準格子の線の間隔は約17 cm であったと推定される¹⁹⁾。なお、褐文の中央に描かれている緑色の小円の直径は、約4.5 cm から5 cm の大きさをもち、ローゼット円内の青い円部分は直径が約9~10 cm, またローゼットの中心の赤い小円は直径が約2~3 cm であることが知られた。このスクロール文様の周囲は色帯で縁取られていたことが出土彩画面から推定され(写真-5, 及び図-5, L ~T)、特に褐文に接して白-青-白と続く色帯が図-5, Mの断片では見られる。その他の断片では褐文に接して順番に白-青-白と塗られている部分のみがわずかにうかがわれるに過ぎないが、色帯Aタイプを示した多くの断片が「ホール」より出土しているため、この帯は色帯Aタイプの一部をなすものであり、その色彩は当「ホール」の中央柱間部分の天井に見られるものと同じように、白-青-白-赤-白と続いていたと想像される。

天井下木材の痕跡の方向はS(W) 地点とN(E) 地点から出土した2片(図-5, S, T)を除き、すべて色

表-3 緑文、ローゼットの半径寸法

A. 褐文半径		B. ローゼット半径	
半径寸法 (cm)	点数	半径寸法 (cm)	点数
7.5 以上、8.0 未満	1	7.0 以上、7.5 未満	1
8.0 以上、8.5 未満	3	7.5 以上、8.0 未満	0
8.5 以上、9.0 未満	5	8.0 以上、8.5 未満	2
9.0 以上、9.5 未満	0	8.5 以上、9.0 未満	5
9.5 以上、10.0 未満	2	9.0 以上、9.5 未満	1
計	11	計	9
(平均 8.7 cm)		(平均 8.5 cm)	

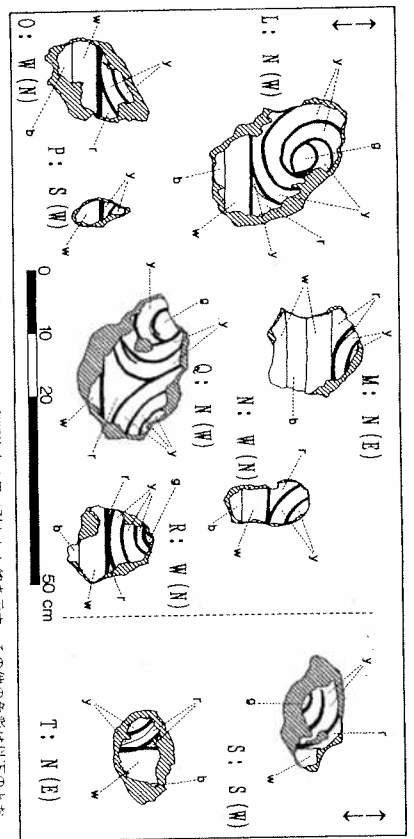


図5 色帯を有するスクロール文様片(大い黒線部分は彩画片上の黒で引かれた線を示す。その他の色彩は以下のとおり: r=赤, b=青, w=白, y=黄, g=緑。矢印は各彩画片の裏に接する天井地下材の痕跡の方向を示す。)

帯に対して直交した向きを示していた。この2片以外の裏面の痕跡の方向と色帯の方向とが直交している彩画片については、天井地下材がこの部屋の短辺方向に沿って並べられていたと考えられるため、本来は「ホール」の長辺方向に沿って描かれていた色帯の断片であると想定され、また天井地下材の痕跡の方向と同じ向きを示した色帯片2片(図5, S, T)に関しては「ホール」の短辺方向に沿って描かれていたものであるとみなされる。ローゼットの帯に接して色帯が描かれている彩画片に関してはひとつも見出すことができなかった。この一方で、「ホール」の長辺方向に沿って描かれていたことが明らかになるため、「ホール」の長辺に沿って描かれた色帯についてはローゼットの帯と接していたのではなく、隅文の帯に接していたと復原される(図6-6)³⁰⁾。

5. 「列柱大ホール」天井画全体の復原考察

前稿では「ホール」の中央柱間部分の天井画について復原考察を行ったが、その結果として、本稿において復原がなされた東側と西側の脇間部分の天井画とを合わせてこの部屋の天井全体の装飾面の復原を試みたのが図6である³¹⁾。

中央柱間部分に描かれた連続するネクト画像と両脇間部分に描かれたスクロール文様の双方の四周には色帯Aタイフが巡っていたと判断されるが、さらにその外側の部分、すなわち色帯と壁際との間隙、もしくは色帯とアーキトリブとの間隙にどのような装飾モチーフがあったかについては現在までのところ明確な答えが出されていない。ただし「王の寝室」においてうかがわれたような不透明の黄土色の帯が、当「ホール」の壁面近くの天井にもあったことを示すと見られる小片が若干出

土しているため、これが唯一の手がかりになると考えられる。それらの画片の損傷が甚だしいため、隣室から侵入した可能性が挙げられることなどから判断することはできないが、「王の寝室」の場合との比較からはこの部屋においても色帯Aタイフの外側に黄土色の色帯が巡っていた可能性はきわめて高いように思われる。このため、図6では「王の寝室」から出土している例を参考とし、黄土色の色帯の幅を約5cm³²⁾と仮定して復原図の試作をおこなった。

当「ホール」の天井や壁面に施された装飾面はバダウイ³³⁾によって復原されているが、実際に出土した彩画片から構成された復原図との違いとしては、すでに前稿で述べたネクト画像や聖刻文字列に属する相違点³⁴⁾の他に、両脇間部分の天井についてはバダウイ文様ではなくスクロール文様であって、しかも黄色の隅文やローゼットの大きさは、バダウイがスバイル文様において想定していたものよりもはるかに小さいことなどの点が挙げられよう。当「ホール」の両脇間部分の幅は住いから壁面内法までの寸法でおよそ3.8m³⁵⁾であるが、バダウイはこの両脇間部分の天井の短辺方向に隅文が4つ並ぶ大きさでスバイル文様を描いている³⁶⁾。しかし上述したように「ホール」のスクロール文様に残された基準格子のひとつとつとの大きさ、すなわち隅文やローゼットの直径は約17cmであったと結論され、この点を勘案しつつアーキトリブの幅や色帯Aタイフの幅なども考慮して計算をおこなうと、両脇間部分天井の幅の内には隅文とローゼットの帯は合計して17本程度、交互に並べられていたはずであると判断される³⁷⁾。また同時にスバイル文様とは異なって、スクロール文様は隅文の帯とローゼットの帯とが交互に並んだモチーフであるため、この図柄には方向性がはっきりと示されることとなり、

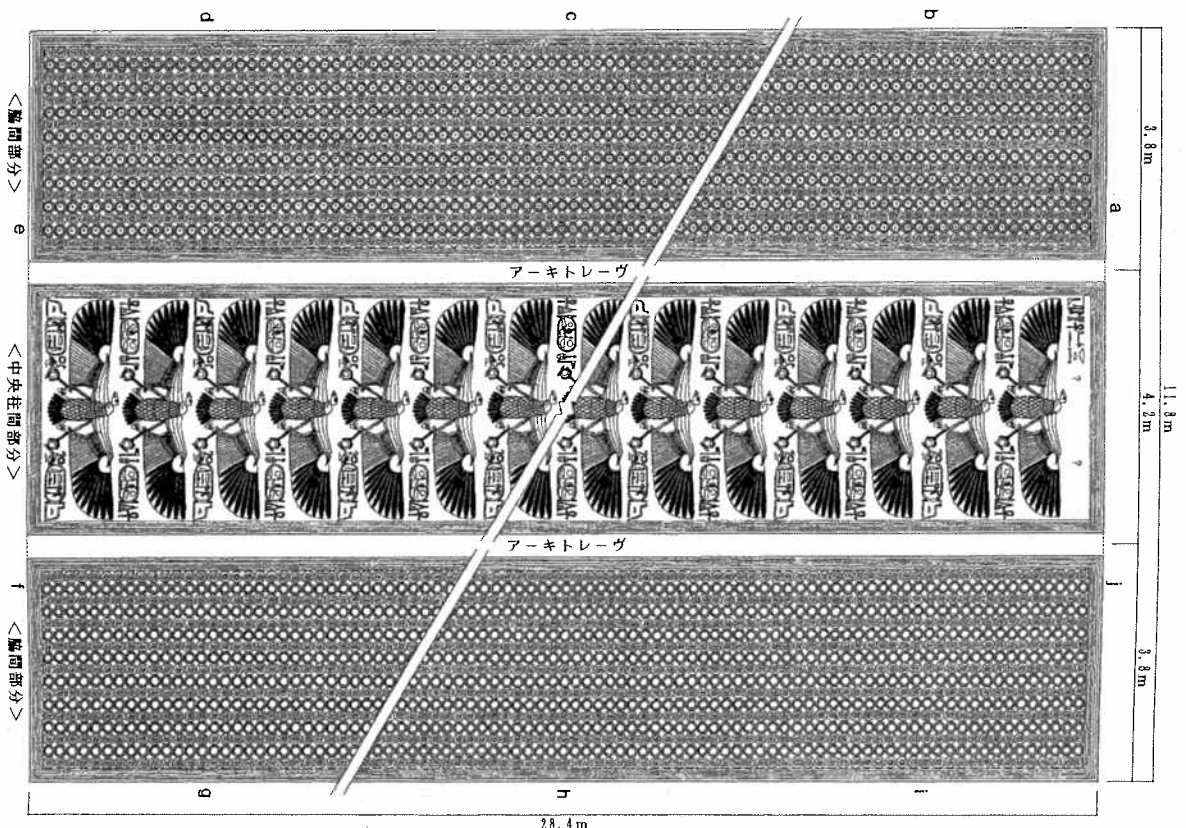


図6 「列柱大ホール」天井全体復原図(見上げ図)(記号a-jは彩画片の出土場所を示す。図1参照。ただし見上げ図であるために出土場所は反転した位置となる。中央柱間部分の、最上位にある聖刻文字列の多くの部分に關しては、該当する出土彩画片が極めて少ないため、復原が困難である。前稿(注1) pp. 116-118を参照。)

スバール文様が描かれる場合とはまた異なった効果が「ホール」に付与される結果となる。

連続するネグロペト面像がこの部屋の軸線を強調する役割を果たしている点については述べたが、両脇間部分に描かれているスクロール文様も同様の効果をあげていたと見ることが出来る。

6. 結 語

前篇に引き続き、ツルカタ王宮の「列柱大ホール」から出した彩面像を用いてこの部屋の両脇間部分の天井面の復原を試み、次いで「ホール」の天井全体の装飾面を復原した。実際の出土彩面像に基づいて天井全体の復原図が作成されたのは初めてであり、同じ新王国期に属する王宮址の再調査が各国の発掘隊によってなされている現在⁹⁾、貴重な一資料が提供できたと思われる。

なお本復原は、文部省科学研究費海外学術研究（昭和60-62年度交付、研究代表者：早稲田大学理工学部教授渡辺保忠、課題：「エジプト・ツルカタ南・魚の丘建築の復原調査研究、ツルカタ王宮址との建築学的・美術考古学的比較研究」）の交付を受けた調査の成果に基づき、おこなわれた点を付記する。

註・参考文献

- 1) 拙稿「ツルカタ王宮（列柱大ホール）天井面に於けるネグロペト面像の復原研究、ツルカタ王宮に関する研究」以下「復原研究Ⅰ」と略、日本建築学会討論会論文報告集、第416号、pp.111-121, 1990.10
- 2) 図-6でつかわれるように、中央柱間部分は当「ホール」の身廊部分に該当する。
- 3) 図-6で見られるように、両脇間部分は当「ホール」における側廊部分に該当する。
- 4) 復原研究Ⅰ、p.118
- 5) これらの幾何学文様についてはすでに復原がなされ、報告がおこなわれている。渡辺保忠・ほか3名、「ツルカタ王宮出土彩面、ROSETTE文、SPIRAL文、SCROLL文の復原について、ツルカタ王宮に関する研究（以下「研究」と略）」9、日本建築学会大会学術講演要録集（以下「大会」と略）、pp.901-902, 1986.8。ただし、図-4に示されるローゼット中央の小円の大きさは0.5dではなく、1dの半である。
- 6) この幾何学文様には、特に定まった名称がつけられているわけではない。幾何学文様については一般に「spiral」、あるいは「scroll」と総称されている（例えばPetrie, W. M. Finders: Egyptian Decorative Art, London, 1893, p.17, 「The spiral, or scroll, is one of the great elements of Egyptian decoration.」が、これを細分化した際の名称は研究者によってさまざまに異なっている。例えば、直線上に幾何学が並べられた文様をPetrieは「continuous spiral」(Petrie, op. cit., p.20)。Wilkinsonは「succession of scroll」(Wilkinson, J. G.: Manners and Customs of the Ancient Egyptians, Vol.2, London, p.125, 1837)。Hamlinは「current scroll」

- (Hamlin, A. M.: A History of Ornament: Ancient and Medieval, New York, p.46; p.47, Fig.51, 1916)。また、Encyclopedia of World Art では「spiral meander」(Vol. X, London, p.638, 1965, Circular and curvilinear 58)。Lexicon der Ägyptologie では「laufende spirale」(Band V, Wiesbaden, 1964, col.1157)と呼称し、Jaqueurは同様の文様について「crochets doubles en forme de S entrait l'un dans l'autre」(Jaqueur, G.: Décoration Égyptienne, Paris, p.12, 1911)と説明している。直線状に連続した幾何学文様をローゼットの連なりとが交互に並べられたさまを、本来ならばこの幾何学文様の名称に反映させるべきであるが、どうしてもこの用語が狭く入りがちであるため、ここでは前篇において用いた「スクロール文様」という訳語を用いることにした。なお、スクロール文様は同時代の墳墓天井においてしばしば見ることが出来る。例えば第18王朝のNebamunおよびIshutyの墓(Titeban Tomb No. (以下、「TT」と略) 181) (Wilkinson, C. K. & Marsh, H.: Egyptian Wall Paintings, The Metropolitan Museum of Art's Collection of Facsimiles, p.30, Fig.25; p.131, No.30.4.102, New York, 1983)、第18王朝のSenenmutの墓 [TT71] (Wilkinson, ibid., p.74, No.30.4.147)を参照。ローゼットの色彩など若干の違いが認められるものの、第18王朝のKaとMekhminの墓 [TT291] (杉原・尾形清芳, 「エジプト美術」、大系世界の美術3、図版78、学習研究社、1972)の天井面に見られるものと同様の文様と考えよう。
- 7) 註6で述べたように、この幾何学文様を示す定まった用語はないが、四方に伸びる蔓を模したこうした幾何学文様を総称する「quadangle spiral」という名称は用いられている。例えばPetrie, op. cit., p.31; Hamlin, op. cit., p.48; Hayes, W. C.: The Scepter of Egypt, Vol.2, p.245, New York, 1959; また、似た表現としてLexikon der Ägyptologie, ibid., 「vierpaß」; Jaqueur, op. cit., p.13, «entoulement quadruplé»などを参照。Hamlinはまたp.47のFig.48において、四方に伸びる蔓を持つ幾何学とローゼットとの組み合わせからなる文様を示し、これを「Spiral All-over」と名づけている。四方に蔓を伸ばすこの幾何学文様の空欄はローゼットが描き入れられる（例：第18王朝のSenenmutの墓 [TT71]; 同、Mamhatの墓 [TT 87]; 同、Huyの墓 [TT 40] など）ほか、聖刻文字が書かれた例もある（第18王朝のHuyの墓 [TT 40]）。またツルカタ王宮（「王の寢室」）の東に位置する部屋からは四方に伸びる蔓の間に牛の頭が描かれた天井面が出土している（Winlock, H. E.: The Work of the Egyptian Expedition, Bulletin of the Metropolitan Museum of Art, Vol.7, No.10, Fig.3, p.186, 1912）。これらに類する幾何学文様については全て「quadangle spiral」と総称したいと考えてよい。本稿で扱うこの幾何学文様にはローゼットもまた描き加えられているもの、用語を簡略化するため、前篇と同じくこの文様を「スクロール文様」と称した。
- 8) 復原研究Ⅰ、p.115参照。
- 9) 交互に並んだ赤と青のローゼットとともに、白-青-白の色彩が描かれる。復原研究Ⅰ、p.114参照。
- 10) 復原研究Ⅰ、p.114参照。

- 11) 同上、p.113参照。
- 12) 同上、pp.113-115
- 13) 渡辺保忠・ほか3名、研究9, op. cit., p.902
- 14) 天然顔料の熱による変色については、例えばガザイエ・フ・ラツグシ著、黒江光孝訳、「油彩面の技術」、pp.277-278, 288-315, 1974、美術出版社などを参照。
- 15) Tytus, Robb de P.: A Preliminary Report on the Excavation of the Palace of Amenhotep III, p.13, New York, 1903
- 16) Winlock, op. cit., p.186
- 17) 例えば「王の寢室」から出土した天井彩面像において、ローゼットの放射状に引かれるべき線がまったく引かれていなかったり、カルトゥーシュ内側のアクトイが描かれなかったりする場合が見られる。図-4、1にうかがわれる論文を描いた黒線の一部の欠落、あるいは図-5、M, Sに見られる横文と色帯との間に本来引かれるべき黒線の一部なども同様の例と見られる。
- 18) 図-3, Aではこのため、本来すべてのローゼットの中心に赤い小円が描かれるはずであったと見なして復原をおこなっている。同時代のツルカタ王宮の墳墓においては、装飾面の一部が未完成のままに終わっているものが多い。通説では、墓の主の急逝で装飾面が間に合わなかったのだと推察されているが、この他に、幾何学文様の場合には鮮やかな色彩の対比を用いて広い面積を埋め尽くすので、その全体的な効果から見ると細部を意図的に省くことで幾何学文様の細部は描き忘れられたとも推察されよう。カラー写真で複製した天井面の未完成の様子を紹介しているものとしては、第18王朝のUshebaの墓 [TT 56] の報告書の図版 (Benichab-Seber, C. et al.: Das Grab des Usheba, p.19; Taf.16.4, Mainz, 1967を参照。
- 19) 復原研究Ⅰ、p.116。また「王の寢室」において先行調査による彩面像の埋め戻しが見られた。渡辺保忠・ほか2名、「ツルカタ王宮 King's Bedroomの彩面出土状況について、研究26」、大会、pp.835-836, 1986.10
- 20) ツルカタ王宮の断片については出土した部屋によって3名、ツルカタ王宮出土コーニス・トラス部の復原について、研究19、大会、pp.1039-1040, 1987.10を参照。部屋によって違いが見られるネグロペト面像については復原研究Ⅰ、p.114を参照。
- 21) 復原研究Ⅰ、p.116、図-4。
- 22) Winlock, op. cit., p.186
- 23) 渡辺保忠・ほか3名、研究26, op. cit., p.835
- 24) 渡辺保忠・ほか2名、「ツルカタ王宮 King's Bedroom出土彩面像の落下位置と天井面の構成について、研究27」、大会、pp.837-838, 特に図-1, 1988.10
- 25) 復原研究Ⅰ、p.115
- 26) 27) 同上、pp.116-117
- 28) 図-2, Cや図-4, Jなどで見られるように、常状に伸びるスクロール文様の向きに対して平行した方向にだけ白線が記されることがあるが、また逆に垂直方向にだけ白線が記されたと思われる断片がいくつかが存在する。断片像が水平、垂直方向の両方に引かれて十字の形が描かれているもの（図-4, A, B参照）は6例であったが、平行する方向にだけ白い塗線が残るものは3例、また垂直

方向のみ引かれているものは2例がわかれた。水平、垂直方向の両方に白線が引かれた例においては、垂直方向に引かれた線の方向が不明瞭である場合が少なくなくあった。ただし、この観察は肉眼によるもので行われている。このためスクロール文様が描かれる天井面の全体にわたっての塗線が正確に描かれたかどうかについては、今後の分析作業の進展を待つ最終的な判断を行いたい。現段階では塗線が一部分、間引かれて配された可能性が指摘される。

墳墓天井における幾何学文様や星長文様、蔓葉格子線と思われるものが残されているさまをいくつかの遺構例で見ることが出来る。一例として第18王朝のAmenhotep,もしくはMahuの墓 [TT 85] (Mamchiche, L.: City of the Dead, Thebes in Egypt, p.56, Fig.47, London, 1987)を参照。蔓葉を用いて蔓葉格子を引く方法に類している文様としてはDavies, N. M.: Ancient Egyptian Paintings Vol. III, pp. xxxix-xxxiv, Chicago, 1936; Mekhitarian, A.: Egyptian Painting, pp.28-30, Geneva, 1978; James, T. G. H.: Egyptian Painting and Drawing, p.10-11, 特にFig.9, London, 1965; Robins, G.: Egyptian Painting and Relief, pp.20-21, Aylesbury, 1966などを参照。

ローゼットの中心から放射状に引かれた黒線はいしはばローゼットの輪郭の外へはみ出してあり、またその本数もまちまちである。論文の中心に描かれた緑色の円は歪んでおり、またその本数もまちまちである。蔓葉の残る箇所で見られるように、蔓葉格子線によっておおまかに配置を決定した後は比較的自由にこのモティーフが描かれたと考えられる。17cmとされている、古代エジプトにおける長さの単位デカジット (1デカジット=約1.9cm) に換算するとほぼ9デカジットという数値が得られる。しかし最初から蔓葉格子の大きさを9デカジットと決定してこの間隔で線を引いたのか、それともスクロール文様を描く予定であった広い天井面を、幾何学的方法によりただ均等に分割した結果、蔓葉格子の大きさが偶然に9デカジットに近い値になったのかは不明であり、この点については今後の研究課題としたい。

なお「ホール」天井の北側・南側でスクロール文様がどのように色帯と接していたかについては、該当すると思われる部分の断片が2例（図-5, S, T）しか出土していないため、多くの点が不明である。このため図-6では、幾何学の遺構例（註6）参照）に見られる共通した傾向（例えば色帯に接する横文において、蔓葉は一本となる点など）に従って復原を行った。

「ホール」の天井面の面積は、この部屋の大きさからおおよそ300m²であったと推定できるが、実際に出土した天井面像の彩面像の表面積をすべて足してもこの大きさには遠く及ばず（本来の大きさである300m²の、20分の一程度と見積める）、他の多くの天井面像は失われたと考えられる。少ない資料から天井全体に及ぶ復原図を仮定することには危険が伴うものの、しかし一方ネグロペト面像、聖刻文字列、スクロール文様、色帯Aタイプ以外の、天井に描かれたことを明確に示した「ホール」における他の装飾モチーフは彩面像中に見出すことができた。このため「ホール」の天井面は上記4つのモチーフのみにより構成されていた可能性が高いと判断

- される。復原研究 I, pp. 113-115 参照。
- 34) 渡辺保忠・ほか 2 名, 「ワルカタ王宮の King's Bedroom 天井画におけるローゼット文様・チェッカー文様の復原について」, 研究 28], 大会, p. 839, 1988. 10
- 35) 同上, p. 840
- 36) Badawy, A. : A History of Egyptian Architecture, The Empire, pp. 49-50; Color Pl. III, Berkeley, 1968
- 37) 復原研究 I, p. 118
- 38) 渡辺保忠・関和明, 「"King's Palace" 列柱大ホールの設計手法について」, 研究 16], 大会, p. 1034, 1987. 10
- 39) Badawy, op. cit., Color Pl. III
- 40) 白一青-白一赤-白と連続する色帯 A タイプの幅はおよそ 20 cm (5 本×4 cm) であり, その外側に幅約 5 cm の黄土色の帯が巡っていたと推定される。アーキトレーズの幅を A, また線文とローゼットの帯の幅は同じ約 17 cm であるからその本数を B とすれば, 脇間部分幅 = $3.8 m = A/2 + B \times 0.17 m + (0.05 m + 0.20 m) \times 2$ (脇間部分の幅は「ホーブル」内法から柱までの寸法)。ただし脇間部分のスクロール文様は線文の帯で始まり, 線文の帯で終わっていたと推定されることから, 線文の帯とローゼットの帯との合計の本数 B は奇数でなければならぬ。ここで B が 15 本, 17 本, 19 本の各々の場合のアーキトレーズの幅 A を算出してみると,
- B = 15 本の場合, $A = 1.50 m$ (1)
- B = 17 本の場合, $A = 0.82 m$ (2)
- B = 19 本の場合, $A = 0.14 m$ (3)
- 前掲 p. 118 で述べたように, アーキトレーズの幅に関しては不明であるものの, (1) と (3) で見られる数値は当「ホーブル」の広さや,あるいは推定される柱の太さ(当

王宮における柱の太さの推定については, 渡辺保忠・堀内清治, 「ワルカタ王宮建築における礎石と柱」, 研究 6, 大会, pp. 895-896, 1986. 8 を参照) などを勘案した場合, 不適当であると思われる。このため, 本稿では線文の帯とローゼットの帯との合計の本数を 17 本と仮定し, 復原を行った。ただし色帯 A タイプも, ローゼットの描き方で見られたように (註 30 参照) かなり自由な筆致で引かれているため, その全幅が一定した値を持たないこと, また, その外側をめぐる黄土色の帯の幅が確認できなかったため, 本稿においては「王の寝室」から出土した例を参考とせざるを得ないことなどから, この合計の本数が 15 本,あるいは 19 本であった可能性を否定できない。

- 41) 復原研究 I, pp. 118-119
- 42) ワルカタ王宮址の調査の他, 第 18 王朝に建造されたアマルナ王宮については, イギリスの Egypt Exploration Society が 1979 年から再調査をおこなっており, 仮報告書が数冊, 刊行されている (Kemp, Barry J. ed. : Amarna Reports I-V, London, 1984-1989)。同じく第 18 王朝の初期に建てられたと見られる (Smith, W. S., rev. by W. K. Simpson : The Art and Architecture of Ancient Egypt, pp. 278-281, Harmondsworth, 1981) Dier el-Ballas の王宮址は 1900 年から翌年にかけて, カリアリニア大学によって一度調査がなされているが, 1980 年から米國・ボストン美術館の Peter Lacovara によって再び調査が始められ, 現在, 報告書の執筆が進められている。

(1990 年 11 月 30 日原稿受理, 1991 年 5 月 1 日採用決定)

W
Pam
Nishimoto

Supplier: **BRZ - Brooklyn Museum Library**

General Record Information

Request Identifier: 33168149 Status: SHIPPED
Request Date: 20070822 Source: ILLiad
OCLC Number: 43120231
Borrower: CGU Need Before: 20070921
Receive Date: Renewal Request:
Due Date: 20070922 New Due Date:
Lenders: *BRZ, BRZ, BRZ
Request Type: Copy

Bibliographic Information

Find this in your library Connect to The Brooklyn
Museum's Library Catalog
Call Number:
Author: Nishimoto, Shin-ichi.
Title: Reconstruction of "the scroll pattern" on the ceiling of
the great columned hall at the Malkata Palace : Studies on the
Malkata Palace II /
Imprint: [S.l. : s.n.], 1991.
Article: , Reconstruction of the ?Scroll Pattern? on the Ceiling
of the Great Columned Hall at the Malkata Palace: Studies on
the Malkata Palace II
Volume: 425
Date: 1991
Pages: 101-12
Verified: <TN:781095><ODYSSEY:216.54.119.59/ILL>
OCLC

Borrowing Information

Patron: Emery, Virginia L
Ship To: Interlibrary Loan Service/Univ.of Chicago
Library/1100 East 57th St. JRL 121/Chicago, Illinois
60637/Ariel 128.135.96.233
Bill To: Same *****CIC REQUEST***** +++++RLG
SHARES+++++
Ship Via: ILDS/LIB RATE/ARIEL/ODYSSEY
Electronic Delivery: Odyssey - 216.54.119.59/ILL
Maximum Cost: IFM - \$30
Copyright Compliance: CCL
Fax: 773-834-2598
Email: interlibrary-loan@lib.uchicago.edu
Affiliation: CIC, Illinet, SHARES
Borrowing Notes: SHARES

Lending Information

Lending Charges: IFM - 10
Shipped: 20070823
Ship Insurance:
Lending Notes: Sent snail mail.
Lending Restrictions:
Return To: copy
Return Via: Library Rate